それすた

連載を開始した果物 ナッポー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時は西暦、２３０７年――世界は大きく三つの国家群に分かれていた。

一つは、米国を中心とした世界経済連合――通称ユニオン。

一つは、中国・ロシア・インドを中心とした人類革新連盟。

そして最後の一つは、新ヨーロッパ連合――ＡＥＵ。

そんな三つの国家群が争いあっていた時、中東の小国、日本では、ソレスタル学園と呼ばれる世界有数のエリート校がある町、太陽町にて世界が滅ぶかもしれないことが起きていたことを、どの国家、組織も知らなかった……

てな感じがで重い感じのあらすじだけど中身はギャグ系の恋愛?小説!そしてさ

らっと制作者が物語に登場し都合よく、そしてメタくおもしろくしていくよ！ではお楽しみに！

目次

第０話「プロローグと設定」――1
第１話「序章」――4
第２話「危機到来」――11

第０話「プロローグと設定」

「エピローグ」

時は西暦、２３０７年――世界は大きく三つの国家群に分かれていた。

一つは、米国を中心とした世界経済連合――通称ユニオン。

一つは、中国・ロシア・インドを中心とした人類革新連盟。

そして最後の一つは、新ヨーロッパ連合――ＡＥＵ。

そんな三つの国家群が争いあっていた時、中東の小国、日本では、ソレスタル学園と呼ばれる世界有数のエリート校がある町、太陽町にて世界が滅ぶかもしれないことが起きていたことを、どの国家、組織も知らなかった……

～設定～

はい！どうも！執筆者のナッポーと申します！本小説は機動戦士ガンダム００の時代背景だけを拝借、ＭＳをパイロットの設定と機体のコンセプトだけで擬人化した少女達をヒロインとした恋愛小説になります！取り敢えず青春させとけばいいでしょ！といった感じに執筆していくので酷いことになると思います！それでも大丈夫という物好きがいてくれるのであれば気長に待っていてくれるとありがたいです！ちなみにで

は下からは本作品のヒロイン達の設定となります！では！

・エクシア

ＴＨＥ王道系ヒロイン・・・　ではなく。物静かで大人しい性格。綺麗なロングの黒髪に低身長の高校一年。好きな人と一緒にいると感情がよく表に出やすい

・デュナメス

お姉さん系ヒロイン。高身長で茶髪に大きい胸を持っている。２４歳。よく主人公の世話をやいてくれる主人公のお姉さん的存在で主人公の家に同居している。双子の妹がいるとかいないとか

・キュリオス

不幸系ヒロイン＋二重人格。黒髪低身長で普段髪の毛で右目が隠れている隠れ目系。高校一年。基本的に幸薄いよくあるトラブルによく巻き込まれるトラブルメーカーである。だが、そのトラブルをもう一つの狂暴な性格がぶっ飛ばしてしまうので吊り橋効果が効かない。入学式にとんでもない伝説を作ってしまい問題児扱いされている

・ヴァーチェ

クール系ヒロイン。高身長、ロングの黒髪、眼鏡、優等生。胸は平均。高校一年。ＴＨＥ・風紀委員的な雰囲気を纏っているよくいる美人な博識お姉さん。普段は静かで感情の起伏が薄いが、デュナメスを慕っている

・ナドレ

活発的運動系ヒロイン。平均的な身長でロングの茶色っぽい黒髪、ひんにゅー。フットワークが軽く、やりたいことを見つけるとすぐ一直線に走っていくよくいる運動部とか入ってそうな女子。だが本人は運動が苦手と言っている。原作設定？んなもん溝に捨てたわ

・アストレア

エクシアのお姉さん。エクシアの身長を大きくして胸をデカクしたらこうなるだろうなぁというイメージそのものである。３２歳。妹であるエクシアを凄く可愛がっており、余計な虫が近付くと物理的に排除しちゃうほど過保護。でもエクシアが幸せならＯＫです！

・アストレアｔｙｐ―Ｆ

アストレアお姉さんのクローン、と自ら名乗っている厨二病患者。実態はアストレアの従姉妹であり、瓜二つな容姿をしているが肌は褐色。３０歳、未婚。性格はちょっと残忍である。褒めると可愛い

第1話「序章」

???「・・・・君。・・○君。○○君」
主人公「もうちょい寝かせて・・・」
???「○○君！もう朝だよ！学校遅れちゃうよ！」
主人公「・・・・え？待って?!もうそんな時間?!ちょっとデュナメスさん！なんでもっと早くに起こしてくれなかったんですか?!」
デュナメス「起こそうとしたわよ！でも全然起きないかったのよ！・・・・・ちょっと寝顔が可愛くて横で寝ちゃった（ボソッ）」
彼女はデュナメスさん。幼くして両親を失った俺を育ててきてくれた第二の母親・・・という感じではなく。たまにおっちょこちょいなお姉さんである。ちなみに同居しているがやましい関係ではない
主人公「え？そんなに起きなかったの？俺？疲れでも溜まってるのかな。というかさっきなんか最後に言ってませんでしたか？」
デュナメス「何も言ってない言ってない！」
主人公「？まぁいいか。それじゃあ行ってきます！」

デュナメス「いってらっしゃ～い」

主人公「ヤバいヤバいヤバい！遅刻するぅぅぅ！」

ここは太陽町。世界有数のエリート校であるソレスタル学園がある賑やかな町である。昔は何もない田舎だったらしいが、３００年前に一人の教師が学校を開いて町の子供達に勉強を教えていたら、上京して成功した卒業生達が寄付をして、教師になったりして大きくなっていき、どんどん有名になっていったら、町の都市開発等の計画が持ち上がり、今に至る。ソレスタル学園はＡ．Ｂ．Ｃ．Ｄ．Ｅとクラスが分かれており、Ａクラスは優秀な生徒達がいる所謂エリートクラスでそこから段々下がっていき、Ｅクラスは落ちこぼれ、というわけではないが平凡なクラスである。そんなソレスタル学園がある太陽町に住んでいる俺は、ＴＨＥ・平凡なＥクラスに通っている。そして現在絶賛遅刻寸前である。

～校門～

主人公「学校到着！間に合ったか？」

???「残念だが間に合っていないね。一分遅刻だ」

主人公「そんなぁ、博士せんせぇぇぇ・・・・」

博士先生「ははっ。残念だけど規則は規則だからね」

彼は博士先生。いつも白衣を着ており、ロボット部の顧問を勤めていることからいつ

の間にか博士という呼び名が広まった
主人公「遅刻部屋はやだよぉぉ・・・」
博士先生「当学園で遅刻した者はクラス、成績、評価に関係なく遅刻部屋にて一時間の反省。あそこは電波が通らない特別性だからね。さぞかし暇だろうけど頑張ってね」
主人公「ウソダドンドコドーン！」
博士先生「叫んでも駄目だからね？」
主人公「ははっ、大きな光が見える。彗星かな？」
博士先生「壊れたふりしても駄目だからね？」
主人公「ちくせう」
博士先生「さて、登校リストにチェックをっと、あれ？おかしいな。僕としたことがAクラスの子を一人チェックしていないな。出席簿と重ねて確認するか」
主人公「やだよぉ。孤独はやだよぉ。一人はやだよぉ。」
???「先生。ミスじゃありません。おはようございます」
主人公「(まさか遅刻仲間！)・・・・ って、エクシアさん?!」
彼女の名はエクシアさん。遅刻したのに言うのもなんだがAクラスの生徒だ。何故かよく俺に話しかけてきてくれる子だ
エクシア「〇〇君、おはよう」

主人公「あ、うん。おはよう」
博士先生「まさか君が遅刻するなんて今日は嵐でも起こるのか？信じられないなぁ・・・・」
エクシア「先生、私が遅刻したのは事実です。大人しく遅刻部屋に行きます」
博士先生「規則は規則だしね。まぁ○○君にとっては仲間が出来たみたいだし・・・いいのか？」
エクシア「それじゃあ、遅刻部屋行こうか。○○君」
主人公「なんで俺より遅れた奴が指揮取るんだよ！これがＡクラスの特権てか！」
エクシア「そんな特権無い」
主人公「シンプルなつっこみだけどちょっとぐらい感情出さない?!」
エクシア「・・・・・・」
主人公「なんで黙るの?!」
博士先生「青春ってやつ・・・　なのかな？」
～遅刻部屋～
主人公「・・・・・・・」
エクシア「・・・・・・・」
気不味い。何も話すことないし、さっきはちょっとテンパって軽い感じに話しちゃっ

たし。というか狭い部屋（5畳半）の中にも男女二人っきりって不味くないか?!

エクシア「・・・・・ねぇ」

主人公「なんでございましょうかエクシア様」

エクシア「なんで敬語なの・・・・ それは置いとくとして一つ聞きたいことがあるの」

主人公「・・・・なんでございましょうか」

エクシア「・・・・・・まず聞く前に敬語禁止。同学年なんだから気軽に話しかけて」

主人公「・・・・・・・・・・・・え? 同学年」

エクシア「え?もしかして今知ったの?」

主人公（コクッ）

エクシア「じゃあ私の今までも苦労はどこへ?何故堅苦しく喋ってるのを崩そうとし勇気を振り絞ったあれは一体・・・・」

主人公（まさかエクシアさんが同学年ってことには驚いたけど、って、あれ? いつもエクシアさんこんな感じだっけ?）

エクシアさんは誰がどう見ても成績優秀でAクラスに相応しい頭脳を持っているのだが、大人しい性格で誰に対しても感情が込もっていないようなしゃべり方をするのだが、さっきのしゃべり方、なんかいつもと違うくないか?

エクシア「頑張って勉強して〇〇君と同じ学園に入学出来たと思ったら渡しはAクラ

ス、○○君はEクラスだし！じゃあ普通に話し掛けたらいいのでは？そう思って話をしようとしたいのになかなか言い出しに行けないし！やっとの思いで話が出来たと思ったら○○君、しゃべり方がいつも固いしさ！確かに私は小さいけどまさか同学年に見られてなかったのはショックだよ・・・・」

主人公「あのう・・・・　エクシアさん？なんで今日はそんなに感情がこもってるのでしょうか？」

エクシア「いつもこもってるよ！○○君と喋ってるときなんか特に！」

主人公「え？」

エクシア「・・・・・・」

主人公「エクシアさん？なんで黙るんですか？」

エクシア「・・・・もう、いいか。丁度二人っきりだし。」

そう言うと彼女は立ちあがり、俺のほうに近付いてきた。そして――――

ドンッ！

主人公「あのう？エクシアさん？これはもしかすると俗に言う・・・・」

エクシア「そうだね、壁ドンというやつだね」

主人公（いやいやいや近い近い近い！座ってるせいで胸が近い！当たるほどは無いけどさ！それでも近いよ！あと良い匂いがするし！これが女子の匂いってやつなのか?!）

エクシア「落ち着けエクシア。私なら言える。ちゃんと言える。・・・・・よし！言うぞ」

主人公（壁ドンという状態。そして二人っきりの部屋。まさかまさかまさか！）

エクシア「私は君のことが」

彼女が俺の予想する言葉かもしれないことを言うとしたとき、俺にとっての救いが出てきた

博士先生「二人とも、一時間たったよ。教室に戻って……　おっと、まさか二人がそういう関係だったとわ。それじゃあ先生は先に戻って」

主人公「逃げようとしないで助けてください！」

博士先生の登場により、俺は救われた

第２話「危機到来」

～教室～

主人公「はぁーーー。もう色々と疲れた……」

???「お疲れ様、○○君。よくあんな部屋に一時間もいられるね。羨ましいかも」

主人公「別に羨むことじゃないと思うんだけどな。キュリオス」

彼女はキュリオス。本来ならＡクラスにいてもオカシクない成績なのだが、入学した日に隣町の不良校の生徒が攻めてきた時に、一人で全員病院送りにしたことによりＥクラスに来たという珍しい例を持つ子だ。普段は皆のことを気づかってくれる良い子なのだが、もはや伝説と化した入学式の惨状で怖がられることも多い。こんなに可愛いのに何故だろうか？

キュリオス「だって、私だったら飽きちゃった瞬間に暴れちゃうかもしれないから……」

主人公「なるほど、そういうことか」

さらっと恐いことを言うのも恐がられてる原因の一つかもしれない

キュリオス「そうそう、○○君さっきの授業受けられなかったでしょ？ノート移す？」

主人公「ありがと。その親切に甘えさせもらうよ」
キュリオス「じゃあ放課後だね」
主人公「あ、ごめん。放課後はちょっと無理なんだ」
キュリオス「そ、そうなんだ。じゃあ明日かな?」
主人公「ほんとごめん!明日の放課後おねがいします!」
今日の放課後は絶対に外せない予定が入ってしまったのだ。それは遅刻部屋から出るときであった
エクシア「放課後、この部屋の前に来て。来なかったら○○君に壁ドンされてキスされかけたって言いふらすからね」
俺の人生がかかった予定なのである。はぁ・・・ なんでこうなったのか・・・・
???「お、○○。遅刻部屋から戻ってきたか」
主人公「ただいまです。ロックオン先生・・・・・・」
彼は数学担当の教師、ロックオン先生である。何故ロックオン先生なのかと言うと、本人がそう呼んでくれと言ったからである
ロックオン先生「二度目の遅刻なんて一体どうしたんだ?」
主人公「いやぁ、寝坊しちゃいまして・・・・」
ロックオン先生「若いから色々と遊びたいってのは分かるが、程ほどにしておけよ?」

主人公「以後気を付けます」
ロックオン君「なら良し！よしそれじゃあ皆席に着け。授業を始めるぞ！」
「キンコーン！カンコーン！キンコーン！カンコーン！」
ロックオン先生がそう言うとチャイムがなり、皆席に着いた
ロックオン先生「まずは前回の復習から――――」
「キーンコーン！カーンコーン！キーンコーン！カーンコーン！」
ロックオン先生「それじゃあ今回の授業はここまで！皆ちゃんと復習はしておけよ？」
主人公「うぅ・・・　これ程まで授業が嫌になることは無いよ・・・」
キュリオス「どうしたの？教室に来てから元気無さそうだけど・・・」
主人公「大丈夫大丈夫。ちょっと嫌なことがあっただけだから」
キュリオス「そうは思えないんだけど・・・　○○君がそう言うなら・・・」
主人公「心配してくれてありがとう」
キュリオス「はわわわ／／／」
何故かキュリオスは慌てて自分の戦い席に戻って机に顔を埋めていた。ただお礼を言っただけなのに・・・
ロックオン先生「青春だねぇ」

博士先生「羨ましいかい？」
ロックオン先生「ビリー・カタギリ?!いたのかよ・・・」
博士先生「ここでは本名は言ったら駄目なんじゃないか？」
ロックオン先生「そうだったな。だがまぁ、羨ましいっちゃ羨ましいな。俺は満足に学生生活なんざ送れなかったからな」
博士先生「世界に喧嘩を売ったテロ組織のガンダムマイスターとは思えない台詞だね」
ロックオン先生「ソレスタルビーイングのメンバーは皆戦争の犠牲者だ。だから紛争根絶のために集まり立ち上がった。何人かは親の意志を継いでメンバーになった奴もいる。それにどいつもこいつもろくな生活を送れた奴が少ない」
博士先生「クジョウもかい？」
ロックオン先生「スメラギさんは生活というよりトラウマだろうな。自分の一つのミスによる負い目を感じてるんだ」
博士先生「そうか・・・」
ロックオン先生「それじゃあ俺は次の授業があるんで」
博士先生「そうだったね。それじゃあね。・・・・死者は語る、か。しかし、博士という呼ばれかたに違和感が無いのは何故だろうか？不思議なこともあるもんだ」

「キーン！コーン！カーン！コーン！キーン！コーン！カーン！コーン！」
主人公「授業が全て終わってしまった……」
キュリオス「だ、大丈夫?!なにか凄く落ち込んでるけど……」
主人公「大丈夫だって」
キュリオス「本当に?」
主人公「本当だって！」
キュリオス「それならいいんだけど……」
博士先生「キュリオス君。あんまり心配のしすぎも駄目だよ?」
キュリオス「先生……」
博士先生「それに、しつこい女は嫌われちゃうよ?」
キュリオス「嫌われ…ッ?!」
そう言うとキュリオスは渋々帰る用意をしていた
博士先生「しかし、○○君も災難だね」
主人公「え?」
博士先生「立ち聞きするつもりは無かったんだけど聞こえちゃってね」
主人公「あー……」
博士先生「僕からは何もやれることは無いから頑張ってね」

主人公「助けてくれないんですか？」
博士先生「流石に無理だよ。最悪僕までこの学校を去ることになるからね」
主人公「そんなぁ・・・・」
博士先生「じゃあ、また明日」
主人公「さようなら・・・・・」
主人公「はぁ・・・・ どうしよ。・・・・・・？」
誰かが覗いていたような気がしたが、気のせいだろう
―遅刻部屋前―
エクシア「来たね、○○君」
主人公「脅されたら誰だって来ますよ」
エクシア「そうだね」
主人公「それで話ってなんなんです？あまり遅くなると心配になる人がいるので早めにお願い出来ませんかね？」
エクシア「安心してくれ。私はこういう時どう言ったらいいのか分からないから単刀直入に言う」
あれ？そういや俺何で逃げ出したかったんだっけ？
エクシア「○○君、君のことが好きだ。付き合ってくれ」

あ、思い出した。これを予想してたから逃げ出したかったんだ
主人公「えっと、何かの罰ゲームで言わされてるんですよね？そうですよね？」
エクシア「何故好きでもない相手に好きだと言わされるんだ？これは私の正真正銘の本当の気持ちだ」
主人公「マジっすか？」
エクシア「マジ、というやつだ」
考えろ。まず俺はＥクラス、彼女はＡクラス、まず不釣り合いだ。付き合ったら嫌がらせを受ける。絶対にだ
エクシア「ちなみに、クラスに不釣り合いがある、と考えているかもしれんが、明日Ｅクラスに転入することになった」
はい不釣り合い作戦実行不可！
主人公「でもそれでも外形とかの不釣り合いも」
エクシア「何故気にする必要がある？私は君の中身を好きになったんだ。外形は関係ない」
主人公「でも、エクシアさんにも嫌がらせがくるかも」
エクシア「私にくる嫌がらせなんて全て色んな手を使って黙らせるさ。勿論君への嫌がらせもな」

完璧にも程がある。これは本当の気持ちなんだろう。それに逆に考えるんだ。こんなに可愛い子が俺のことを好きになってくれてるんだ。ＯＫしてもいいじゃないか！そうだ、ＯＫしよう。それがいい

主人公「エクシアさん。その告白、慎んで……」

キュリオス「ちょっと待ったぁぁぁーーー！」

主人公「キュリオス?!なんでここに?!」

キュリオス「エクシアさん。○○君は渡しませんよ！○○君は私が貰います！」

エクシア「ほう、いきなり出てきて横取りですか。やるというならやりますよ」

キュリオス「望むところです！」

主人公「えっと、どゆこと？」

エクシア「これで気付かないとは、君もしや鈍感か？」

キュリオス「はっきり言葉で言わないと気付かない鈍感ですよ」

主人公「つまり？」

キュリオス「○○君のことが好きです！一目惚れでした！」

エクシア「こういうことだ」

主人公「えええええええ！」

エクシア「さて、思わぬところでライバル登場か。だが○○君は私の告白を受け取ろ

うとした。私の勝ちだ」
主人公「ちょっと考えさせてください」
エクシア「〇〇君?!考え直せ!こんな美少女と付き合えるんだぞ!そのチャンスを棒に振るのか!」
主人公「二人とも可愛いからどっちをとったらいいのか迷うんですよ!」
エクシア「かわッ?!／／／」
キュリオス「えへへ、可愛いって言われちゃった・・・　／／／」
エクシア「だが私のほうが可愛いはずだ!そのはずだ!」
キュリオス「いいえ!私です!」
エクシア「私だ!」
キュリオス「私です!」
エクシア・キュリオス「ぐぬぬぬぬぬ!〇〇君はどう思うの!」
・・・・・・・・・・
エクシア・キュリオス「いつの間にかいなくなってる?!」
―???―
ロックオン先生「ああ、Ｅクラスに三人、Ａクラスに一人になった」
ロックオン先生「そうだな。人手不足なら弟でも使ってやってくれ。どうせ暇をもて

余してるだろ」
ロックオン先生「え？全員こっちに来る?!マジかよ・・・　ここじゃ狭いな。引っ越すか」
ロックオン先生「ああ、問題ない。ただ何人か働いてもらわないと無理だな」
ロックオン先生「気にすんなって。奇跡的に得た二度目の人生だ。なら楽しくやらさせてくれ」
ロックオン先生「ありがとな」
ロックオン先生「おう。じゃあ次はこの町でな、スメラギさん」
ピッ
ロックオン先生「さて、これから忙しくなるな」